

して 遊女花子  
わき 吉田少将  
わき連 少将の従者(二人)  
間狂言 野上宿の長

1 狂言がしてを呼び出し、自分の宿からしてを放逐すると告げる。

して／げにや本もとよりも定め無き世といひながら。憂うれき節ふし繁はき河竹の。流の身こそ悲しけれ。  
地謡／分け迷ふ行くへも知らで濡れ衣。野上の宿を立出でて。野上の宿を立出でて。近江路なれど憂うれき人に。別れしよりの袖の露そのま。其儘消えぬ身ぞつらき。其儘消えぬ身ぞつらき。(中入)

註 野上の宿 中仙道の宿の一つ。現在の関ヶ原付近。

2 して退場後わきが登場し、舞台が野上の宿から都、糺の森へと移る。

わき・わき連／帰るぞ名残富士の嶺ねの。帰るぞ名残富士の嶺の。行きて都に語らん。  
わき／これは吉田の少将とは我が事なり。さても我過あやぎにし春の頃東あすまに下り。はや秋にもなり候へば。只今都へ上り候。  
わき・わき連／都をば霞と共に立出でて。霞と共に立出でて。暫し程経る秋風の。音白河の関路より。又立帰る旅衣。浦山過ぎて美濃の国。野上の里に着きにけり。野上の里に着きにけり。  
わき／急ぎ候程に。これははや美濃の国野上の宿に着きて候。いかに誰かある。

わき連／御前に候。  
わき／此処に班女といひし女に契りしことありつる。未だ此処に在るか急ぎ尋ね候へ。  
わき連／班女の事を尋ね申して候へば。長と不和なる事の候ひて。今は此処には御座なき由申し候。

わき／さては定め無き事ながら。若もし其の班女帰り来る事あらば。都の伝に申し上せよと固く申し附け候へ。急ぐ間程無く都に着きて候。又宿願の子細有れば。これより直すぐに糺ただすへ参らふずるぞ皆々供仕り候へ。

註 糺の森 下鴨神社のこと。

3 糺の森に参詣しているわきのとこへしてがやってくる。

して／春日野の雪間を分けて生ひ出で来る。草のはつかに見えし君かも。由無き人に馴れ衣の。日を重ね月は行けども。世を秋風の便りならでは。ゆかりを知らする人も無し。夕暮の雲の涯はたてに物を思ひ。上の空に憧れ出でて。身を徒いたずらに為すことを。神や仏も憐みて。思ふ事を叶へ給へ。

それ足柄箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。夫婦男女の語らひを。守らんと誓ひおはします。此の神々に祈誓せば。などか験の無かるべき。謹上再拜。

恋すてふ。我が名はまだき立ちにけり。

地謡／人知れずこそ。思ひ初めしか。

して／あら怨めしの人心や。げにや祈りつつ御手洗川に恋せじと。誰か云ひけん空言や。されば人心。誠少き濁り江の。澄まで頼まば神とても。受け給はぬは理や。とにもかくにも人知れぬ。思の露の。

地謡／置き所いづくならまし身の行くへ。心だに誠の道に叶ひなば。祈らずとても。神や守らん我等まで。真如の月は曇らじを。知らで程経し人心。衣の玉は有りながら。怨有りやともすれば。猶同じ世と祈るなり。猶同じ世と祈るなり。

註 御手洗川 ここでは下鴨神社境内を流れる川

#### 4 狂女を面白く思つたわき連がしてと問答を始める。

わき連／いかに狂女。何とて今日は狂はぬぞ面白う狂ひ候へ。

して／うたてやなあれ御覧ぜよ今までは。揺がぬ梢と見えつれども。風の誘へば一葉も散るなり

。適々心直なるを。狂へと仰有る人々こそ。風狂じたる秋の葉の。心も共に乱れ恋の。あら悲しや狂へと仰有りさむらひこそ。

わき連／さて例の班女の扇は候

して／現なや我が名を班女と呼び給ふぞや。よしそれとても憂き人の。形見の扇手に触れて。打

置き難き袖の露。故事までも思ひぞ出づる。班女が閨の内には秋の扇の色。楚王の台の上には夜

の琴の声。

地謡／夏は果つる。扇と秋の白露と何れか先に起き伏しの床冷じや独寝の。寂しき枕して閨の月を眺めん。

月重山に隠れぬれば。扇を挙げて之を諭へ。

して／花琴上に散りぬれば。

地謡／雪を蒐めて春を惜しむ。

して／夕べの嵐明日の雲。何れか思のつまならぬ。

地謡／寂しき夜半の鐘の音。鶏籠の山に響きつつ明けなんとして別れを催し。

して／せめて閨洩る月だにも

地謡／暫し枕に残らずして。又独寝になりぬるぞや。

翠帳紅閨に。枕並ぶる床の上。馴れし衾の夜すがらも。同穴の跡夢も無し。よしそれも同じ世の。命のみをさりとともと。いつまで草の露の間も。比翼連理の語らひ。其の驪山宮の私語も。誰

か聞き伝へて今の世まで洩らすらん。さるにても我が夫の。秋より前に必ずと。夕べの数は重なれど。あだし言葉の人心。頼めて来ぬ夜は積れども。欄干に立ち尽して。そなたの空よと眺むれ

ば。夕暮の秋風。嵐山嵐野分も。あの松をこそは音づるれ。我が待つ人よりの。音づれをいつ聞かまし。

して／せめてもの形見の扇手に触れて。

地謡／風の便りと思へども。夏もはや杉の窓の。秋風冷やかに吹き落ちて。団雪の扇も雪なれば名を聞くも冷じくて。秋風怨有り。よしや思へばこれもげに。逢ふは別れなるべし。其の報なれば今更。世をも人をも怨むまじ。唯思はれぬ身の程を。思ひ続けて独居の班女が閨ぞ寂しき。絵にかける。(序の舞)

して／月を蔵して懐に。持ちたる扇。

地謡／取る袖も三重襲。

して／その色衣の。

地謡／妻の予言。

して／必ずと夕暮の月日も重なり。

地謡／秋風は吹けども。

して／荻の葉のそよとの便りも聞かで。

地謡／鹿の音虫の音もかれがれの契。あら由なや。

して／形見の扇より。

地謡／形見の扇より。猶裏表有るものは人心なりけるぞや。扇とは空言や。逢はでぞ恋は添ふものを。逢はでぞ恋は添ふものを。

註 翠帳紅閨 翠の帳、紅の閨

同穴 偕老同穴のこと。共に老い、同じ墓穴に葬られること。

比翼連理 比翼は比翼の鳥のことで、雌雄それぞれ目と翼が一つずつで常に一体となって飛ぶという想像上の鳥。連理は連理の枝のことで、根

元は別々の二本の木で幹や枝が途中でついて、木理が連なったもの。偕老同穴とならんで男女の離れがたく仲むつまじいことのたとえ。

驪山宮 玄宗皇帝と楊貴妃の離宮

## 5 狂女の様子を見とがめたわきがその扇に気付く。

わき／いかに誰かある。あの狂女の持ちたる扇見たき由申し取りて来り候へ。

わき連／いかに狂女。あのお輿の中より狂女の持ちたる扇御覧じたき由仰せ候。そと参らせ候へして／これは人の形見なれば。身を離さず持ちたる扇なれども。形見こそ今は仇なれこれ無くは忘るる隙もあらましもをと。思へどもさすが又。添ふ心ちする折々は。扇取る間も惜しきものを。人に見することあらじ。

地謡／こなたにも忘れ形見の言の葉を。岩手の森の下躑躅。色に出でずはそれぞとも。見てこそ知らぬこの扇。

して／見てはさて何の為ぞと夕暮の。月を出せる扇の絵の。かくばかり問ひ給ふは何のお為なる

らん。

地謡／何ともよしや白露の。草の野上の旅寝せし。契の秋は如何ならん。

して／野上とは。野上とは東路の。末の松山浪越えて。帰らざりし人やらん。地謡／末の松山立つ浪の。何か怨みん契り置く。

して／形見の扇こなたにも。

地謡／身に添へ持ちしこの扇。

して／輿の中より。

地謡／取り出せば。折節黄昏にほのぼの見れば夕顔の。花を描きたる扇なり。此上はこれみつ惟光しそくに紙燭召して。ありつる扇。御覧ぜよ互いに。それぞと知られ白雪の。扇のつまの形見こそ。妹背の中の情けなれ。妹背の中の情けなれ。

(喜多流謡本による)